

バルナブースの「脱物質化」

——『A. O. バルナブース全集』の「哀れなシャツ屋」に関する一考察——

佐藤 みゆき

[キーワード：①「哀れなシャツ屋」 ②「日記」 ③脱物質化 ④アンドレ・ジッド ⑤メナルク]

1. はじめに

Valéry Larbaud (ヴァレリー・ラルポー、1881-1957) 研究において、*A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* (『A. O. バルナブース全集、すなわち一つの短篇、詩および日記』、1913年、以後『全集』と略記)¹⁾の第三部に収録された「*Journal intime*」(「日記」)が André Gide (アンドレ・ジッド、1869-1951)の助言を受けて書かれたことはよく知られている²⁾。ジッドは、ラルポーが1908年7月4日に匿名で自費出版した *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth* (『裕福な好事家の詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』、以下『裕福な好事家の詩』と略記)³⁾の寄贈を受け、読後に日記の執筆を呼び掛けた。それから五年後、*Le Journal d'un milliardaire* (『ある億万長者の日記』)が、ジッドらが主催する NRF 誌上で1913年2月から6月にかけて掲載された後に、『全集』に

「日記」として収録された。こうしてジッドの助言が実を結び、『全集』が完成した。

『全集』に関する研究動向を見ると、「日記」もしくは第二部に収録された「Poésies」（「詩」）が対象となることが特徴的である。「日記」に関しては、ラルボーの研究会で彼の生誕地 Vichy に拠点を置く Association internationale des amis de Valery Larbaud（ヴァレリー・ラルボー国際友の会）が2002年に *Le manuscrit de « Barnabooth »*（『「バルナブース」の原稿』）⁴⁾ を出版したことが挙げられる。最近では、ナント大学の比較文学研究者 Paul-André Claudel が、パリ第四大学在学中に執筆した「Fardeau du capital et rêve de l'acte gratuit : Les tourments du Riche Amateur Archibald Olson Barnabooth」（「資産の重責と無償の行為の夢想—裕福な好事家アルシバルド・オルソン・バルナブースの苦悩」）⁵⁾ において、バルナブースの浪費癖がスノビズムの否定であると同時に極みであると論じている。また、*Les langages de Larbaud*（『ラルボーの言語』）⁶⁾ には、「詩」に関し「自由詩」や「括弧の中の言説」など複数の観点からの研究が掲載されている。

ところが、『全集』に収録された三作品のうち最も早く、1903年に書かれた「哀れなシャツ屋」は、これまで分析対象になることが少なく、「皮肉を交えた短篇⁷⁾」と、短く触れられる程度である。その理由として、作者ラルボーが『全集』の作品を、「哀れなシャツ屋」、「詩」、「日記」と収録順に書いたこと、主人公バルナブースの人物像の変化が最終部の「日記」において最も顕著であることが考えられる。事実、バルナブースは「日記」を書くことによって自己探求や自己確立を果たしており、それらは『全集』の主題の一つとなっている。また、作者ラルボーの作家としての力量の面から言えば、「哀れなシャツ屋」はラルボーの初期作品であることから、作家として確立する以前の作品として見なされる。「詩」に収録したほぼ全篇の作品が米国の詩人 Walt Whitman（ウォルト・ホイット

マン、1819-1892）の「自由詩」の影響を受けており、表現方法の斬新さによってラルボーは当時のフランス文学界の注目を集めた。と同時に「日記」が加わったことで『全集』は高く評価された。このように『全集』に取り組むラルボーの評価が、作品の執筆を重ねるにつれ高まったことは確かである。

しかし、既に「哀れなシャツ屋」において、バルナブースの人物像に変化の兆しが見られることは注目に値する。後に彼が「日記」に記すことになる物の所有に対する問いが「哀れなシャツ屋」において始まっているからである。そこで本稿では、『全集』の成立過程におけるジッドの影響やテキストをもとに、バルナブースが果たす«*dématérialisation*»（「脱物質化」）の観点から「哀れなシャツ屋」を考察したい。

2. ジッドの助言—「日記」の誕生とメナルクの影—

先に述べたように、ジッドは『全集』の創作に影響を与えた。しかし、『裕福な好事家』に収録された「伝記」「短篇」「詩」の三作品のうち、ジッドが「哀れなシャツ屋」に一度も言及しなかったことが、以下のやりとりから明らかになる。まず、ジッドは『裕福な好事家』読了後の1908年7月28日の日記に、「ヴァレリー・ラルボーのあの詩は実に面白い。これを読んでみると、『地の糧』において私はもっとシニクであるべきだったことがわかる⁸⁾。」と、「詩」に対する感想を残している。さらに、ジッドは同月30日にラルボーに宛てた手紙で、献本に対する礼を述べた上で、「『バルナブース氏の伝記』の部分は不十分で不明確です。しかし、あなたの詩は、おお！ ほとんど全てが、非常に素晴らしい⁹⁾。」と書き、「伝記」を批評している。また、これらの個人的な感想と書簡に加え、ジッドは翌年1909年2月の*NRF*創刊号の紙上で、『裕福な好事家の詩』に収録された「伝記」に代わる「日記」の必要性を次のように述べている。

「もし旅行の途中に『日記』を付けていたなら、このバルナブース氏は私たちにそれを見せてくれたらいいのに¹⁰⁾。」

当時、ジッドはラルポーに *NRF* への参加を呼び掛けていた。ジッドは 1908 年 10 月 30 日の手紙で、近く創刊予定の *NRF* の編集陣がラルポーの寄稿を熱望している旨を伝え、年末には具体的に「日記」の名を挙げて寄稿を勧め、また、翌年 1909 年 6 月 17 日には「日記」の執筆を打診したことを言外に匂わせつつ再び勧誘している¹¹⁾。これに対して、ラルポーはジッドへの返信に喜びの気持ちを書き記している¹²⁾。そのジッドの助言が「日記」執筆の契機の一つになり、バルナブースの人物像が具体化するのである。そして、これらの記録は、ジッドが示した「伝記」と「詩」に寄せた関心が「日記」の創作の原点であることの証拠であると同時に、「哀れなシャツ屋」がジッドの関心を惹かない存在だったことを裏付けてもいよう。

「日記」へのジッドの影響は、大きく分けて二つある。一つはジッドが日記形式へのこだわりを持っていたことである。ジッドと日記形式との関わりは深く、ラルポーに助言する前に *Les cahiers d'André Walter* (『アンドレ・ワルテルの手記』、1891) を、後には *Le symphonie pastorale* (『田園交響楽』、1919)、*L'école des femmes* (『女の学校』、1929)、*Les faux-monnayeurs* (『贋金つかい』、1925) など、複数の作品に日記形式を用いている。そしてもう一つが、バルナブースへの、ジッド作品の登場人物 *Ménalque* (メナルク) の影響である。メナルクは *Les Nourritures terrestres* (『地の糧』、1897) や *L'Immoraliste* (『背徳者』、1902) に登場する、「汎神論崇拜と遊興癖、また独特の性癖を持った、コスモポリタンでエゴイスト、放蕩好きな¹³⁾」、バルナブースを彷彿させる複数の特徴を持つ人物である。

1913 年 6 月 14 日、*NRF* に掲載された「ある億万長者の日記」を読んだジッドはラルポーへ手紙を書き、生まれ変わったバルナブースに対する賞

賛の言葉を述べた。

私が一息に読んだばかりの4回目と5回目の『バルナブース』を前に、私の驚きと感嘆のほかに、あなたに何も申し上げることはありません。そこには不安、苦悩、驚くべき数々のことがあります。これほど定義しづらいものはありません。なぜなら、まさしくこれは私が読んだ中で最も現代的な書物の一つだからです。すばらしい！ 私はあなたの友人であることを嬉しく思います¹⁴⁾。

このような経緯で書かれた「日記」は、「伝記」に代わって1913年に『全集』に収められた。「伝記」では、バルナブースの執事の甥がバルナブースの言動を伝聞する体裁を取っていた。これに対し「日記」では、バルナブースが291日間の旅の間、四冊のノートに66日分の日記を書く。それは『全集』の八割に相当する量である。こうして、旅の記録のみならず、自らの内面を子細に語るバルナブースが登場したのである¹⁵⁾。

3. 「日記」における「脱物質化」

「日記」に詳述されたバルナブースの人物像が持つメナルクとの共通点は複数挙げられよう。例えば、ジッド作品の特徴とされる「無償の行為」や信仰、自我の解放など、個々に、また複合的に論じられるべき事柄や、メナルクにニーチェや、ラルポーとも親交のあったオスカー・ワイルドの思想が影響している点などが挙げられる。ジッドおよびジッド作品は、『全集』に直接的に、また間接的に広く作用しているのである。

ところが、ラルポーがバルナブースを考案した当初に書かれ、『裕福な好事家の詩』と『全集』の双方に収録された「哀れなシャツ屋」に対象を絞ると、バルナブースが持つ「哀れなシャツ屋」と「日記」との掛け橋と

なる行為、すなわち「脱物質化」が浮かび上がってくる。Jean-Paul Sartre (ジャン＝ポール・サルトル、1905-1980) の日記に書かれた『全集』読後の所感によれば、バルナブースが持ち物を全て売り払う行為の発想とは「メナルクと『背徳者』のミシェルから得たもの¹⁶⁾」である。サルトルは、バルナブースとメナルクが共に車や土地などの具体的な財産とは手を切り、株券や小切手といった抽象的なもののみを所有する点を挙げて、「バルナブースが財産を売り払う『脱物質化』¹⁷⁾」がジッドの作中人物に由来すると指摘している。また、先に挙げたクローデル氏も、バルナブースが旅行の初期に行う「脱物質化」の行為が、『地の糧』で推奨された「(権利・所有権などの) 喪失」であり、物質的所有を全て放棄するジッドの作中人物の助言をバルナブースが忠実に遂行したと評している¹⁸⁾。

そこで、これらの指摘を「哀れなシャツ屋」に先立ち、まずは「日記」の記述に照合して具体例を挙げることにしよう。バルナブースは初日の日記(4月11日)に財産を処分しつつあると記している。列車の旅を始めたばかりのバルナブースは、自前の展望車を捨てて二等車へ移り、居合わせた乗客を相手に自分の財産について、それらを既に売り払ったことを隠しながら一時間に渡り話をする。ここでのバルナブースの財産とは、「城館や別荘、ヨットに自動車など、私の『莫大な財産』」である¹⁹⁾。ヨットを除き«mes»と複数形の所有形容詞を用いていることが、バルナブースの«immenses propriétés»(「莫大な財産」)が誇張ではないことを示している。また、6日目(4月16日)に「ぼくの富を脱物質化してから、その富が何より悪の力として、これほどはっきりと僕の眼に映ったことはなかったから²⁰⁾」とも記している。バルナブースは不動産を«le démon de la propriété immobilière»(「不動産の悪魔」)²¹⁾と呼び、「僕はもはや競馬用の馬小屋や、狩りの仲間たちの奴隷ではないし、行く先々で不動産という悪魔に出くわすことももうないのだから²²⁾」、そして「不動産、なんて汚

らわしいのだろう！²³⁾」と述べる。このようにバルナブースは財産、とりわけ不動産を手放すのである。

同時にバルナブースとメナルクとの間には決定的な相違が見られる。それはバルナブースが浪費癖を併せ持つ点である。4月23日の「またしても買い物主義の発作——もしそんな言い方ができるなら²⁴⁾」との記述からは、バルナブースが一切合財を手放すといった不退転の決意のもとで行動していたのではないことがわかる。彼は«boutiquisme»と名付けた発作に度々見舞われ旅先で買い物を繰り返すが、ホテルの使用人に品物を分け与えるなど、手元に置くことなく処分している。この発作は、6月18日、ヴェネチア滞在中にも見られ、役に立たない物を買込み、一ダースのトランクを引きずることになった上で、「でも実は僕自身にもわからないんだ。どうしてこういうものを買ってはいけないのだろうか？ 恥ずべき行為を受け入れることには、ある種の徳が含まれているのではないだろうか？²⁵⁾」と述べている。

この傾向は日記の終盤にも見られる。10月3日の記述を見ると、三週間のストックホルム滞在中の出来事とともに、「〔ホテルの〕室内装飾に使う品々を大量に買い入れたが、ロンドンに家を買うまでの処置としてレミントンに住むヤルザ姉妹のところに送らせた²⁶⁾。」と綴る。さらに「日記」の最終日である1月26日には、妻を得て南米へと旅立つ前夜のバルナブースが「荷物に囲まれて僕はこれを書いている。どの部屋も床から天井までトランクでいっぱいだ。妻はリュ・ド・ラ・ベを、僕はボンド・ストリートを持って行く²⁷⁾。」と記している。バルナブースは株券や現金といった彼の行動に必要な手段となるものを除き、次々に所有物を処分する。けれども時折、必要以上に新しい物を買集めては始末することを、彼は最後まで繰り返すのである。

確かにバルナブースはメナルクの人物像を借りることで「自由人として

の初めての旅²⁸⁾」の出発点に立った。その後、バルナブースが人間的に成長したと評価されることは、「日記」の記述が示すとおりである。しかし、『地の糧』の«*Quatrième livre*»(「第四の書」)に現れるメナルクが、「第四の書」の主題である「清貧のすすめ」との主題を強調するために「富豪礼賛」の姿勢であることに対し、バルナブースは似て非なる人物像を持っている。バルナブースの浪費癖に改善が見られず、あるいはあえて保ち続けていたという独自性が、メナルクの写し絵はないことを強調しながら、バルナブースの人物像を際立たせるのである。

4. 「脱物質化」の傾向―「哀れなシャツ屋」―

バルナブースと「脱物質化」との関わりが「日記」を通して詳らかになったところで、『全集』の収録順序をさかのぼり、ラルポーが1908年に発表した「哀れなシャツ屋」にバルナブースの特徴が既に見られることを確認したい。

『裕福な好事家の詩』の「伝記」によれば、バルナブースの先祖はハドソン川の干拓事業への従事によって財をなし、彼はその資産を継承した成金である、と説明されている²⁹⁾。ところが、『全集』ではバルナブースの生い立ちは不明である。『全集』の冒頭に置かれた«*V. L.*»との署名の入った«*Avertissement*»(「はしがき」)に、「この若き億万長者の『日記』はもちろんのこと、彼の『詩』さえもが、彼の人柄、教育、友人たち等々に関する詳細を十分に含んでいるので、全く主観的な、そしていわば自己中心的なこの本の冒頭に、生い立ちに関する覚え書をつける必要はないものと信じる³⁰⁾。」との断り書きが付されるのみである。

しかし、『裕福な好事家の詩』と『全集』の双方に収録された「哀れなシャツ屋」の最終部の、バルナブースの所有するヨットの名が«*Le Parvenu*»(「成金号」)³¹⁾であると記された箇所のみを取り上げても、彼の出自

と生活ぶりが推測されよう。実際、「哀れなシャツ屋」でのバルナブースの言動を見ると、折々に財力をふるう「成金」を強調するような浪費が繰り返し現れる。例えば、シャツ屋の娘に近づく口実として、シャツ屋の主人にシャツやズボン下と使うはずのないナイト・キャップをそれぞれ一グロス（144個）注文し³²⁾、一万フランの事業資金を提供した上³³⁾、高級レストランに接待する。そこでは店を借り切った上にオペラ座の歌手を何人か、モンマルトル界隈の詩人を一ダース、共和国儀仗兵吹奏楽団、蓄音機を用意する³⁴⁾。また、シャツ屋の娘と恋人の結婚式では「大枚をはたいてワイン係を買収³⁵⁾」し、宴席に連なっている。

だが、バルナブースにとって金銭とは、あくまで行動するための手段でしかない。そして、彼が金銭を介して求めるものは精神の充足である。行動の結果として彼の手元に物理的に「物」が存在するにせよ、「物」が彼に精神的な安定をもたらすことはない。先に挙げた大盤振る舞いによって、バルナブースには使い道のない大量のシャツ類やナイト・キャップが残るが、同時に彼はシャツ屋の主人、ひいてはシャツ屋の娘に近づくための一歩を踏み出した満足感を得る。またワイン係の買収は「人目を避けつつ陽気な饗宴に連なる³⁶⁾」ためであり、その目的は宴席を垣間見ることによって好奇心を満たすことにある。このように、彼の目的は物を得ることではなく、心を満たすことなのである。

後にバルナブースが旅や人との関わりといった経験を積みながら成長してゆく様子が「日記」に詳述されることに比べ、「哀れなシャツ屋」から得られるバルナブースの人物像は荒削りなものに過ぎない。しかし、「哀れなシャツ屋」においてバルナブースは、「物」が精神的充足を得る手段になり得ないことを悟り始めているのである。その顕著な例として、商売の凋落に嘆くシャツ屋の主人の、19世紀末から第一次世界大戦前にかけて流行した art-nouveau（アール・ヌーヴォー）様式の調度品を配して店

の再興を試みる様子が挙げられる。

それを踏んで歩くのがわしだけだとしたら、いったいわしはなぜ1,500フランも出して、こんなアール・ヌーヴォー風の絨毯を買ったのだろう？³⁷⁾

設備は手早く整えられた。哀れなシャツ屋は残った金をすっかりつぎ込んで店の壁にアール・ヌーヴォーの壁紙をはり、アール・ヌーヴォーの家具を備え付け、アール・ヌーヴォーの絨毯を洗わせ（というのも、彼の涙がしみを作っていたから）、ついには布地のストックもアール・ヌーヴォー風の生地に入れ替えた³⁸⁾。

シャツ屋の主人は流行のデザインという新しい物を追うことで店の暖簾を守るために多額の費用を重ねる。そこにバルナブースが「アール・ヌーヴォー」を反復させることで皮肉めいた意味合いが生じ、シャツ屋の主人の姿を「哀れ」に描きだすのである。

「哀れなシャツ屋」の中で、バルナブースが物の所有に対し、好意的であれ嫌悪感であれ直接的な言動を起こすことはない。しかし、流行に乗じた物で店を満たし、外観をつくろうことに自尊心の回復や保持の手立てを求めるシャツ屋の滑稽さを通して、内心の充足に重きを置くバルナブースの立ち位置が確かめられるのではないだろうか。シャツ屋の主人とバルナブースの対比、すなわち一方は精神的な安定を得るために物を求め、他方は物を手放すことによって精神的な開放を得ようとする構図が、この「アール・ヌーヴォー」の語のもとに見られるのである。そして、これらが「日記」に先立つ「哀れなシャツ屋」におけるバルナブースの「脱物質化」の傾向なのである。

バルナブースにとって金銭とは、それを持っているにせよ使うにせよ、彼の物理的な欲求を満たすための道具ではない。物を所有するためではなく、彼の行動や人生を媒介し表現する手段としての道具である。後に彼は「la recherche de l'absolu」（「絶対の探求」）³⁹⁾ を実現するために旅立つ。その際、不動産やヨットなど、旅先への携行が不可能で常的に管理が必要な所有物は彼の足かせでしかない。同時に、旅を伴う探求には、行く先々で必要に応じて換金や両替が可能な株券や現金などが不可欠である。よって、処分する財産の選別が、「自由人」になるための第一条件となったのである。

再び作者ラルポーに目を向ければ、彼が「哀れなシャツ屋」を書きあげたのは1903年、「日記」の執筆に取り掛かる五年前である。しかも、ジッドの助言を得て改作に取り組む際にラルポーは「哀れなシャツ屋」にほとんど手を加えていない⁴⁰⁾。ゆえにラルポーは、バルナブースという登場人物を構想した当初から、すなわちジッドの影響を受ける以前から、バルナブースに内面の充足を求めて思索する人物像を与えていたと言えるのではないだろうか。このように、後の「詩」や「日記」に現れるバルナブースの片鱗をうかがわせる点において、「哀れなシャツ屋」は『全集』の礎をなす。バルナブースは旅行を続けながら日記を書くことで物質と精神をめぐる葛藤を離れた。この自己変革の達成に至る過渡期を示す作品が「哀れなシャツ屋」なのである。

5. おわりに

バルナブースは「脱物質化」によって、ヨーロッパ各地での自由な旅と新天地への出発という人生の転機を得た。所有物の放棄が内面の自由、すなわち「絶対の探求」への道標となった。そこにジッドやジッド作品の存在が影響していたことも、また確かなことである。

作者ラルポーはジッドの要請に二つの点で応えた。一つは「伝記」を「日記」形式に改めた作品を執筆したことである。『全集』の刊行以降に「伝記」が再び収録・出版されることはなかった。もう一つは、「日記」にジッド作品に由来する要素を潜ませたことである。ジッドの「旅の間に日記を付けていたのなら見せてほしい」との要望に対し、ラルポーはバルナブースを物から解放させ、彼に自由を与えた。その時、バルナブースには浪費癖という独自性も備わった。ラルポーはジッドから示されたキーワードである「日記」、「旅」に加え、バルナブースにジッド作品から得た概念を投影し、「脱物質化」というジッド作品の核となる要素を加えた上で、ラルポー独自の作品を創りだしたのである。またラルポーは作品の最後に手がけた「はしがき」の最終部で、「本書は完本であり、かつ決定版である⁴¹⁾」と述べた。そこにバルナブースの独自性に異論をはさませないラルポーの矜持が読み取れる。彼が「哀れなシャツ屋」において、既にバルナブースの原形を作り上げていたことに、「哀れなシャツ屋」の『全集』における意義が見出せるのである。

ジッドとの交流は、友人 Charles-Louis Philippe (シャルル＝ルイ・フィリップ、1874-1909) によってラルポーにもたらされ、後の *NRF* をはじめとする文芸誌での活躍につながった。また両者はラルポーの幼なじみで終生の友人 Marcel Ray (マルセル・レイ、1881-1951) の紹介によって知り合っている。ラルポーとレイが四十年に渡って交わした書簡が『全集』創作の記録としての価値を持ち、また『全集』に複数の友人の助言や批評内容が反映されていることなど、『全集』の創作過程には興味深い周辺事項が含まれている。ラルポーに影響を与えた作家達との関係などテキスト外の情報分析を手掛かりに、さらに深い読解を試みることを今後の課題としたい。

註

- 1) *A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* の引用は、Valery Larbaud, « A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime », in *Œuvres*, préface de Marcel Arland, Commentaires et notes par G. Jean- Aubry et Robert Mallet, Essai de bibliographie chronologique par Jacqueline Famerie, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1958 に依拠し、以後 *A. O. B., Pléiade* と略記する。また、他の部分をプレイヤー版から引用する場合には、出典を *Pléiade* と略記のうえ、タイトルとページ数を併記する。なお邦訳は、ヴァレリー・ラルポー『A. O. バルナブース全集』、岩崎力訳、東京、河出書房新社、1973 年、を参考にした上での拙訳である。
- 2) 『全集』の刊行をめぐる収録作品改作の経緯は、西村靖敬氏の『『伝記』から『日記』へーラルポーの『裕福なアマチュアの詩』から『A. O. バルナブース全集』への改作めぐってー』、『千葉大学フランス文学研究』第 2 号、千葉大学文学部フランス語フランス文学研究室編、1988 年、52-61 頁に詳しい。
- 3) テキストはプレイヤー版 1135-1186 頁に収録されている。収録作品は「Biographie de M. Barnabooth」（「バルナブース氏の伝記」、以下「伝記」と略記）、短篇小説「Le Pauvre Chemisier」（「哀れなシャツ屋」）および 52 篇の詩篇「Poèmes de Barnabooth」（「バルナブースの詩」、以下「詩」と略記）の三作品である。
- 4) *Le manuscrit de « Barnabooth »*, dossier établi par Anne Chevalier, Association internationale des amis de Valery Larbaud, Cahiers Valery Larbaud, Nouvelle serie n° 2, Paris, Éditions des cendres, 2002.
- 5) 米国ブラウン大学フランス文学科が主催するサイトで公開されている。
http://www.brown.edu/Research/Equinoxes/journal/Issue%209/eqx9_claudel.html
(2010 年 4 月 1 日確認)
- 6) *Les langages de Larbaud*, études réunies par Stéphane Chaudier et Françoise Lioure, Centre de recherches sur les littératures modernes et contemporaines, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise Pascal, 2006.
- 7) « “ Le Pauvre Chemisier ”, conte ironique, présente le cynique Barnabooth séduisant la fille d’un petit boutique parisien, complétant ainsi le portrait de ce “ parvenu américain ” pour qui tout s’achète. », Béatrice Mousli, *Valery Larbaud*, Paris,

Flammarion, 1998, p. 124.

- 8) « Amusant, ces poèmes de Valery Larbaud. En les lisant, je comprends que, dans mes *Nourritures*, j'aurais dû être plus cynique. », André Gide, *Journal*, tome 1, édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1996, p. 602.
- 9) « La partie “ biographie de M. Barnabooth ” est insuffisante et indécuse—mais vos poèmes—oh! presque tous—sont excellents. », *Correspondance André Gide, Valery Larbaud 1905–1938*, Cahiers André Gide, n° 14, édition établie, annotée et présentée par Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1989, p. 34.
- 10) « S'il tint un “ journal ” au cours de ses voyages, ce M. Barnabooth devrait bien nous le montrer. », André Gide, « Poèmes par un Riche Amateur », in *NRF*, n° 1, 1^{er} février 1909, p. 103.

この「ノート」の掲載にあたり、*NRF*の同人 Jean Schlumberger (ジャン・シュランベルジェ、1877–1968) が「差し当たり、私はラルポーには特にこだわっていないのだが。」と意見していた。「À noter que pour écrire cette note, Jean Schlumberger s'était plus ou moins récusé et avait déclaré “ Je ne tiens pas particulièrement à Larbaud pour le moment.” », Roger Grenier, « Valery Larbaud compagnon de route », in *La place de la NRF dans la vie littéraire du XX^e siècle : 1908–1943*, les entretiens de la Fondation des Treilles, textes réunis par Robert Kopp, Paris, Gallimard, 2009, p. 215.

- 11) Cf. *Correspondance André Gide, Valery Larbaud, 1905–1938*, op. cit., pp. 35–37.
- 12) *Ibid.*, p. 38.

「日記」に先立ち、ラルポーは *NRF* に 1910 年 3 月号から 6 月号にかけて中編小説 *Fermina Márquez* (『フェルミナ・マルケス』、1911 年 Gallimard 社刊) の原稿を掲載した。彼はこの当時から 1912 年にかけて『ウォルター・サヴェジ・ランドーの対話集』とのテーマで英文学の博士論文の準備をしていたが、論文は未完成に終わり、以後創作活動に専念することになる。

- 13) « Ce personnage cosmopolite, égoïste et sybarite, avec son culte du panthéisme, son goût de la débauche, sa sexualité particulière, pourrait bien être l'Oscar Wilde que Gide connut à Paris en 91–92, retrouva plus tard à Florence, puis à Blidah. », Justin O'Brien, *Les nourritures terrestres d'André Gide et les Bucoliques de Virgile*, Boulogne-sur-Seine, Prétexte, 1953, p. 24.

メナルクは英国の作家 Oscar Wilde (オスカー・ワイルド、1854–1900) の耽美主義の影響を受けているとも言われる。ジッドとワイルドは 1891 年に

パリで出会っていた。『全集』ではバルナブースの友人で食客のアイランド人 Maxime Claremoris（マクシム・クレアモリス）が耽美主義的傾向を持つ。「Sans doute, il pense qu'il me fait grand honneur en m'empruntant de l'argent, et que les milliardaires comme moi ne sont bons qu'à nourrir les esthètes comme lui [Maxime Claremoris]. *Esthète*, oui, c'est cela. Au fond, il est très 1880, ce cher Pèlerin, très ami d'Oscar Wilde, et homme des cathédrales, et décadent ; un Montmartrois de Leiceister Square. », *A. O. B., Pléiade*, pp. 103–104. (イタリック強調は原典による)

- 14) « Rien à vous dire sinon mon épatement et mon admiration devant le *Barnabooth* dont je viens de lire d'un coup la quatrième et la cinquième parties. Il y a là-dedans une inquiétude, une angoisse, extraordinaires ; et rien n'est moins aisé à définir — car vraiment c'est un des livres les plus *modernes* que j'ai lus. Bravo! J'ai plaisir à me sentir votre ami. », *Correspondance André Gide, valery Larbaud 1905–1938, op. cit.*, p. 144. (本文および注の強調は原典による)

なお、「4回目と5回目」とは、*NRF*における連載が1913年2月号から6月号まで五回であったうちの5月号および6月号掲載分を指す。

- 15) この点について、ジッド研究者の中村栄子氏がメナルクの側から見たバルナブースとの共通項に関し、「メナルクをヴァレリー・ラルポーのA.O.バルナブースになぞらえるむきもあるが、両者の間には、単なる冒険の夢想と実際に経験された冒険の話—そこにも文学的潤色が入り込むのは当然である—との違いがある。」と、両者の生活の中心が旅行にあることについて言及している。しかし、作者ラルポーと作中人物バルナブースを同一視しえないことから、ラルポーの旅行の経験をもとに作中人物であるバルナブースとメナルクを比較することはできないだろう。中村栄子『小説の探求—ジッド・ブルースト・中心紋—』、東京、駿河台出版社、2003年、142頁を参考にした。

- 16) « Barnabooth vend tous ses biens, “ châteaux, yacht, automobiles, immenses propriétés... ” et il appelle ça “ dématérialiser sa fortune ”. Le geste est inspiré par celui de Ménélaque, celui de Michel dans *L'Immoraliste*. », Jean-Paul Sartre, *Les carnets de la drôle de guerre : septembre 1939–mars 1940*, Paris, Gallimard 1983, p. 354.

これはサルトルが第二次世界大戦中の1939年から1940年にかけて、アルザス地方に気象観測兵として動員された当時に付けていた日記で、引用は1939年12月20日のものである。

- 17) *Ibid.*
- 18) 以下の部分を要約した。「Ainsi, le geste de “ dématérialisation ” que réalise le milliardaire au début de son voyage mime avec humour la “ dépossession ” prônée par *les Nourritures terrestres* : Barnabooth applique scrupuleusement le conseil du personnage de Gide, qui invitait à abandonner toute propriété matérielle [...] », Paul-André Claudel, « Fardeau du capital et rêve de l'acte gratuit : Les tourments du Riche Amateur Archibald Olson Barnabooth », *op. cit.*
- 19) « J'ai choisi la face la plus épanouie, et pendant une heure, je n'ai fait que parler de mes châteaux, de mes villas, de mon yacht, de mes automobiles, de mes « immenses propriétés » (en restant au-dessous de la réalité, car ils ne m'auraient pas cru ; et en me gardant bien de dire que j'ai fait vendre tout cela - ils n'auraient plus compris). », *A. O. B., Pléiade*, p. 86.
- 20) « Car, depuis que j'ai dématérialisé ma richesse, jamais elle ne m'a mieux paru, avant tout, une puissance malfaisante. », *A. O. B., Pléiade*, p.94.
- 21) *A. O. B., Pléiade*, p. 88, 131.
- 22) « [...] puisque je ne suis plus l'esclave de mon écurie de course et de mon équipage de chasse ; puis je ne rencontre plus, au bout de tous mes chemins, le démon de la propriété immobilière. », *A. O. B., Pléiade*, p. 88.
- 23) « La propriété immobilière, quelle souillure! », *A. O. B., Pléiade*, p. 131.
- 24) « Nouvelle crise de boutiquisme, si j'ose dire ainsi. », *A. O. B., Pléiade*, p. 104.
なお、「boutiquisme」はラルポーによる造語である。*Trésor de la langue française : Dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, tome 4, publié sous la direction de Paul Imbs, Paris, Édition du Centre national de la recherche scientifique, 1975, p. 861, s.v. « boutique ».
- 25) « Mais vraiment je ne vois pas pourquoi je n'en achèterais pas moi-même? N'y a-t-il pas une vertu dans l'acceptation de la laideur? », *A. O. B., Pléiade*, p. 217.
- 26) « Acheté beaucoup d'objets d'ameublement que j'ai fait adresser en attendant d'avoir une maison à Londres, aux demoiselles Yarza, à Leamington. », *A. O. B., Pléiade*, p. 280.
「日記」の終章で、バルナブースは「ヤルザ姉妹」の姉にあたる Conception (コンセプション) と結婚する。レミントンは英国イングランド中央部、ウォーリックシャー州の町。
- 27) « J'écris au milieu des bagages : il y a des malles du plancher jusqu'au plafond, dans toutes les chambres. Ma femme emporte la rue de la Paix, et j'emporte Bond

Street. », *A. O. B., Pléiade*, p. 301.

「リュ・ド・ラ・ペ」はパリの、「ボンド・ストリート」はロンドンの高級ショッピング街。

- 28) « Mon premier voyage d'homme libre [...] », *A. O. B., Pléiade*, p. 88.
- 29) Cf. « Biographie de M. Barnabooth », *Pléiade*, pp. 1136–1137.
- 30) « Par suite de diverses circonstances qu'il me semble inutile de rapporter ici, je me suis engagé à publier ce recueil des *Œuvres complètes* de M. Barnabooth, le riche amateur bien connu./ Le « Journal » du jeune milliardaire, et même ses « Poésies », contiennent assez de détails sur sa personne, son éducation, ses amis, etc., pour que je me sente dispensé de placer en tête de ce livre, tout subjectif et pour ainsi dire égocentrique, une notice biographique./ Cette édition est complète et définitive. / V. L. », *A. O. B., Pléiade*, p. 21.
- 31) *A. O. B., Pléiade*, p. 39.
- 32) « Il revint le lendemain au passage, et, surmontant sa timidité, commanda douze douzaines de chemises qu'il paya aussitôt, [...] Le surlendemain, le multimillionnaire revint ; il commanda douze douzaines de caleçons d'été, paya sur-le-champ, [...] Le lendemain de ce jour, M. Barnabooth revint. Il commanda douze douzaines de bonnets de soie pour la nuit (bien qu'il n'eût point l'habitude d'en porter). », *A. O. B., Pléiade*, pp. 31–32.
- 33) « Voici dix mille francs que je mets dans votre affaire, pour commencer. », *A. O. B., Pléiade*, p. 32.
- 19世紀の一フランの貨幣価値が現在の千円に相当することを物語の最終部の「1902年2月」との記述に適應すると、バルナブースからシャツ屋への資金提供は約一千万円になる。鹿島茂『新版 馬車が買いたい!』、東京、白水社、2009年、189頁を参考にした。
- 34) « Il avait loué tout le restaurant Paillard, plusieurs chanteurs de l'Opéra, une douzaine de poètes montmartrois, la musique de la garde républicaine et un phonographe. », *A. O. B., Pléiade*, p. 33.
- 「バイヤール」は第一次世界大戦の頃までパリにあった最高級レストランの名前。
- 35) « Ayant corrompu à prix d'or les sommeliers, M. Barnabooth assista, invisible, à ce joyeux festin. », *A. O. B., Pléiade*, p. 39.
- 36) *Ibid.*
- 37) « Pourquoi ai-je acheté ce tapis art-nouveau de quinze cents francs, si je dois être

seul à le fouler? », *A. O. B., Pléiade*, p. 26.

先に挙げた貨幣価値を用いて換算すれば、絨毯の価格は約 150 万円である。

- 38) « L'installation fut vite faite. Le pauvre chemisier employa tout l'argent qui lui restait à faire poser du papier art-nouveau sur les murs de son magasin, à y faire placer des meubles art-nouveau, à faire nettoyer le tapis art-nouveau (taché par ses larmes), et enfin à renouveler son fonds de toiles et de tissus art-nouveau. », *A. O. B., Pléiade*, p. 29.
- 39) « Et " oisif ", moi qui consume ma vie dans la recherche de l'absolu! », *A. O. B., Pléiade*, p. 84.
- 40) Cf. « Notes », *Pléiade*, p. 1194.
- 41) « Cette édition est complète et définitive. », *A. O. B., Pléiade*, p. 21.

La « dématérialisation » de Barnabooth :

La réflexion sur « Le Pauvre Chemisier » de A. O. Barnabooth, *ses œuvres complètes*

SATÔ, Miyuki

Le sujet de cet article porte sur l'analyse de A. O. Barnabooth, *ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* (1913) de Valéry Larbaud (1881–1957), et traite en particulier de la dématérialisation de la richesse de Barnabooth qui dit : « Car, depuis que j'ai dématérialisé ma richesse, jamais elle ne m'a mieux paru, avant tout, une puissance malfaisante. ».

Il est reconnu que Larbaud a achevé A. O. Barnabooth d'après les conseils d'André Gide, alors directeur de la NRF. Gide, après avoir lu *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth*, publié en 1908 sous l'anonymat, a proposé plusieurs fois à Larbaud d'écrire « Le journal intime » de Barnabooth à la place de la « Biographie de M. Barnabooth ». Larbaud a suivi les conseils de Gide et a écrit pendant plusieurs années jusqu'en 1913, *Le Journal d'un milliardaire*, publié dans les numéros de la NRF de février à juin 1913 et repris en juillet de la même année, sous le titre final de A. O. Barnabooth.

Gide a eu une double influence sur Larbaud. La première porte sur la question du genre, si Larbaud a fait de Barnabooth un diariste, c'est parce que Gide avait déjà écrit des livres sous la forme de journal intime. Par ailleurs, le caractère de Barnabooth est influencé par ceux des personnages de Gide, et notamment par celui de Ménalque des *Nourritures terrestres* (1897) et du personnage de *L'Immoraliste* (1902). Certes, c'est grâce aux conseils de Gide que le personnage de Barnabooth a pu mener à bien sa quête de lui-même, mais le fait qu'il existe déjà des tendances de la « dématérialisation » dans « Le Pauvre Chemisier », premier écrit de la trilogie de A. O. Barnabooth, prouve bien que Larbaud n'est pas tombé dans la simple imitation de Ménalque ou des romans gidiens. C'est d'ailleurs au début de son journal intime que Barnabooth a réalisé la « dématérialisation » de sa richesse, qui est un des sujets principaux de cette œuvre.

Dans « Le Pauvre Chemisier », nous pouvons trouver la genèse de la personnalité de Barnabooth qui se demande ce qu'est le bonheur matériel et moral. Barnabooth, ne peut cesser de gaspiller son argent, mais pour lui, les biens sont des ressources pour passer à l'action, et ceux surtout immobiliers sont plutôt des entraves. C'est pour cette raison qu'il parle de « dématérialisation » de sa richesse, à l'origine du personnage de Barnabooth et que celui-ci détaillera plus tard dans son *Journal*. Ainsi qu'il a été dit plus haut, Barnabooth est le personnage que Larbaud a inventé dès le début de son écriture et, à cet égard, « Le Pauvre Chemisier » en est le fondement.

(人文科学研究科フランス文学専攻 博士後期課程3年)